

Title	生き残りをかけた大阪発ベンチャー企業の戦い：技術とイノベーションによる事業継続性の考察
Author(s)	落合, 平八郎
Citation	年次学術大会講演要旨集, 38: 1080-1081
Issue Date	2023-10-28
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/19278
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

生き残りをかけた大阪発ベンチャー企業の戦い 技術とイノベーションによる事業継続性の考察

○落合平八郎（落合平八郎広報事務所）

hey0320@ochiaikoho.com

1. はじめに

日本の中小企業の創業から5年までの生存率は81.7%であり、米国やイギリスなど他国に比べて高いとされている*1。一方で、ビジネスの現場では、これよりもはるかに厳しい見方がある。ベンチャー企業が新しいビジネスと新たな雇用を生み出す可能性があり、経済の活性化において重要であることから、起業は大手企業にはない価値を提供できるという視点がある。

2. 目的

2018年4月に創業し、独創的な商品を開発・販売している大阪発のベンチャー企業が存在する。本企業のコア技術は光触媒である。光触媒は酸化チタンに光を照射することで、その表面に接触する有機物を化学反応によって分解する。この技術は大学や研究機関との共同研究によって効果を実証し、独創的な商品の創出に貢献してきた。無名の本企業が広告を使用せずにいかに事業を拡大できたかを検証し、考察する。筆者は本ベンチャー企業に約3年近く所属しており、現在は広報コンサルタントとして企業の広報活動を支援している。当時を振り返りながら、客観的な視点でベンチャー企業が直面する課題についても考察する。

3. 結果

光触媒の技術の応用を研究機関との共同研究によって、空気の浄化から食品保管、さらには水の浄化を実現することができた。これらはすべて、地球の環境課題に役立てたいという明確な企業理念、パーパスに紐づいたものであり、その社会性が評価された。

4. 考察

製造業ベンチャーにおいては、高度成長時代から必要とされてきた高機能で便利な製品を開発し、それをうたうことは大手企業との差別化が難しい。独自技術をコアコンピタンスとし、社会課題に対応した商品をつくる必要があるとあり、その商品がその時代の要請に適合するかどうか非常に重要だと考える。一方で、安定した経営を続けるためには資金調達が必要であり、自社の活動を社会に積極的に発信し続けることが重要である。製品を購入するターゲット層によっては、新聞やテレビなどのオールドメディアも有効な手段の一つであることもある。

5. 結論

知名度の低いベンチャー企業にとって、自社の技術の優位性だけをアピールするのではなく、社会への貢献をわかりやすく情報発信することが、結果的にその会社の信頼度を高め、売上にも反映され、資金調達も行えることがある。これを持続するためには、コア技術のイノベーションが重要である。

6. 謝辞

本発表の機会をいただきました一般社団法人大阪科学技術センター山本陽一様はじめ、本学会の大槻眞一先生、西原一嘉先生に深謝いたします。

参考文献

1：中小企業庁、2017、「中小企業白書」



図1 光触媒材料から製品までに流れ（出典：カルテック株式会社ホームページ）

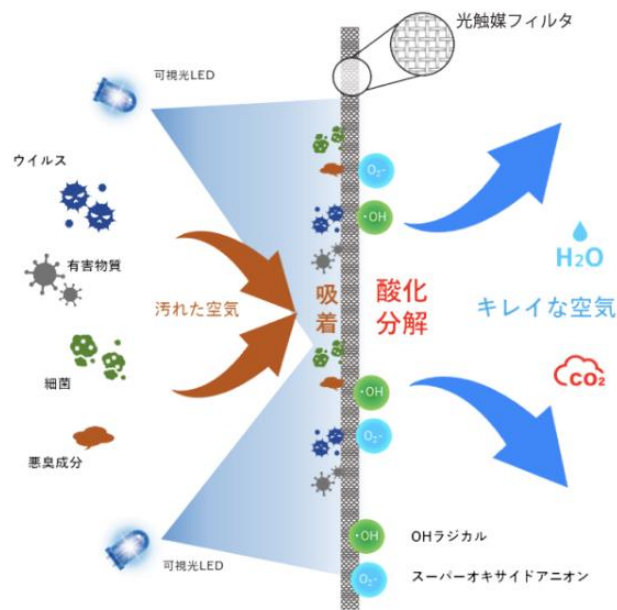


図2 光触媒による効果（出典：カルテック株式会社ホームページ）



図3 光触媒を応用し庫内のカビや菌、ガスを除去する食品保管庫（株式会社カルテックホームページ）